



騷
馳
考
全

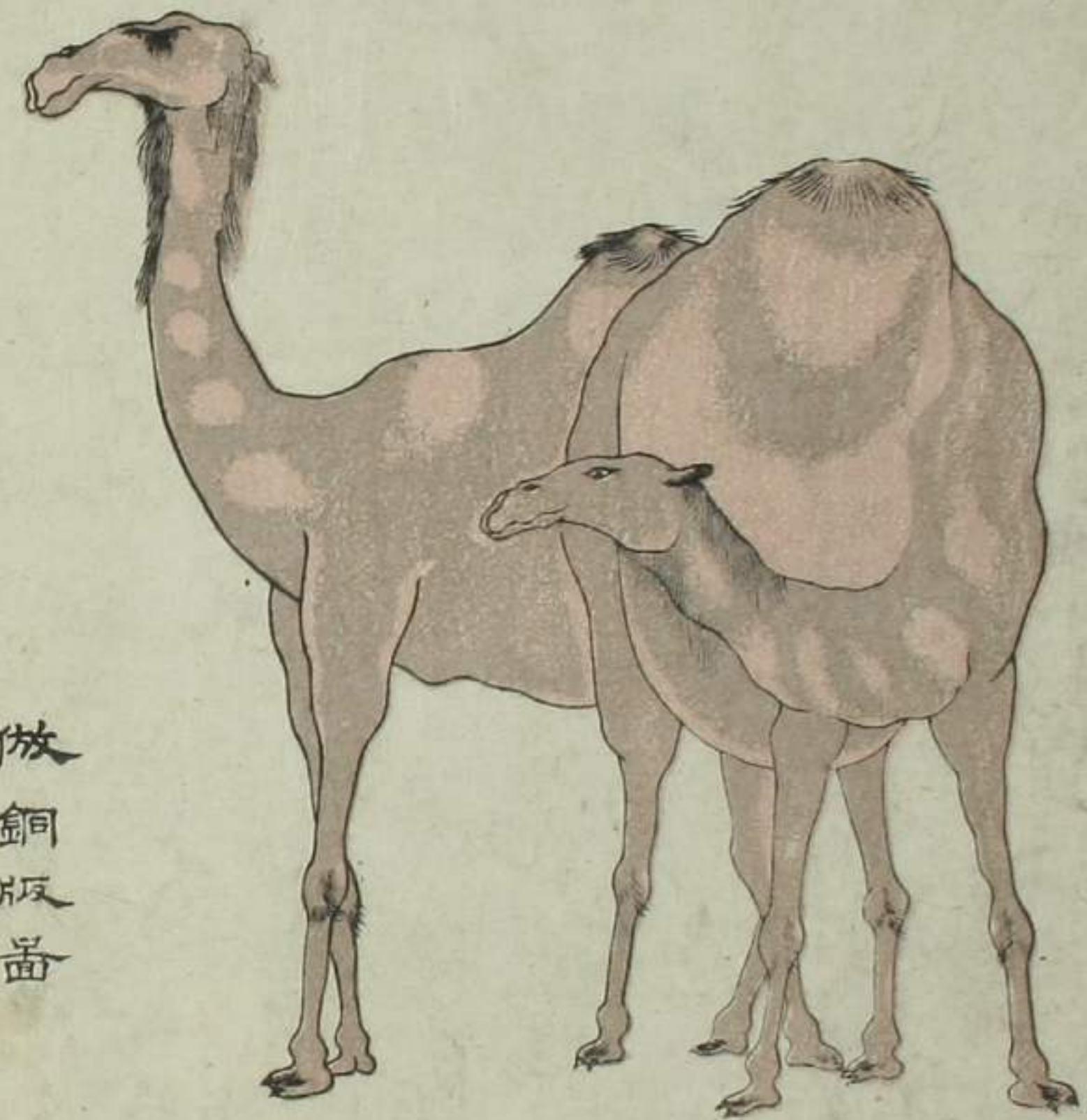
特別
二15
2450



特

門二五
號2450
卷

Kameelpleister Zonder Weerga.



做銅版畫

東陽寫

三十年
六月二十四日
購求

*op't verzoek van Kückij
geschreeven Door
Tjerkiro*

可公

長嘶不待九方臯
千里村良沒
轉漕自有閑鞍
備溫縶還愈海
胎畏風濤擬啗
黃帝指南巧却
惜盡英血北勞
啗草飲泉也知
足何曾伏櫪
變逢遭

詠橐駝
不用其故事

小菴山田草書

定山公愷

印

印

附言

余戲點出橐駝故事得數十通劄為譯解授之
免輩以為譚資亦慨之一端筆研之魔障也玉
巖書肆之所曰虎吉時泛余向事見之私喜賺免曹
奪稿去上梓未示所謂黎棗何辜橫加涅照雖然
竊謂世之事著述者皆曰不朽苟非有德之言一時
傳尋亦漸滅莊周云朝菌不知晦朔近時著作徒類
此何有於不朽今如此考一時戲墨唯博一祭可矣梓而
行之省騰寫之勞已何不朽是圖夫子論桓司馬石楨云不
如速朽之愈余於此篇亦自道之因領許公行甲申重陽
前一日它山識

星鳩叟士秦鍾伯美書



橐駝考序

書云珍禽奇獸不育于國是槩指無用異
物苟有所用則夫夏翟大龜熊羆狐狸儼
然列禹貢之典聖人固不賤焉

國家盛德遠矣時貢厥方物客歲高蘭船載
駱駝北牡各一隻至于長崎今茲來之江戶觀
者日為羣矣蓋其性馴善負重行遠又能
知水脉風候乳汁可以充藥物而其矢焚之
煙氣直上可以為烽火有用如此其孰賤之
故余抄出古人言及此者若干則欲以示世

書賈某聞之乃持橐駝考者一卷未請余訂
正余乃校閱又書所得於上標更弁以關子
圖及吉雄子所贈余番篆題字促之上木是
豈特為一異獸哉亦竊所以欲昭

國家之德之致于天下後世也

文政七年歲次甲申秋九月之日撰于好問
堂中北窓下北峰山崎美成



書駝考首

予嘗讀鶴經龜經禽經牛馬經之類而竊
歎古人雅獸之少之妙之必留意于此不
敢忽焉不翅是也。陸羽之於茶。竇子野之於
酒。虞若初之於鼎彝。其他玉於蘭竹牡丹
筆墨雲刀劍手版之類。皆有之。書存焉。是
不但出人意也。色也。蓋格物窮理之一
端。而後涉世講名物本字之學。志咸為
所資。取焉。其切實不偉哉。近者崎奧商
舶載來駝駝二頭。恐者視為奇貨。自京
攝。而轉致于江戶。開場於西國櫓頭。觀者

けりあるれりとはよき物にていふは是を校合なり
 てたれしの人もえやそいふに物せりて取け
 るをさあふいふあみあたくてやめかんな文字あつ
 りたのぬさるる山崎義成大人の流もたにまのりて
 けりしを物せりていふは是を校合なりとめていふに
 おもしきもなめりていふは是を校合なりとめていふに
 海上臨奇集といふ書なるにさうていふは是を校合
 を脚くするも校合なりとていふは是を校合なりと
 五をやくも校合なりとていふは是を校合なりと
 けりしは書の名なれりていふは是を校合なりと
 志りていふは是を校合なりとていふは是を校合
 をかきりていふは是を校合なりとていふは是を校合

文政七とせなすの月もあはれに海 平武臣

索駝考

江戸 它山唐公愷 稿 安西 武臣希吉 校

畧説 索駝の如き見たり

索駝

駱駝

駝駝

又 攔牛

犛牛

封牛

封の音峯とて犛牛作る

攔牛

索駝と正名ありて駱駝の駱ハ索と聲ちりまが故に訛る
 あり。駝と索と同一にこととも俗字ありて攔牛以下ハ同物異
 名ありて其名の出るところ等下文に引証を得て知るべし。

索駝考

索ハもと索囊也。索たぐハもと索囊たぐのう也。索たぐハもと索囊たぐのう也。鄭玄ていげん詩箋しせん小せう者しや戎索じゆさくといひ。大だいかると囊のうとよの索たぐをアと索装たぐさうと連言れんげんよれハ直ちよく一旅いちりよの行装きやうさう荷擔かたん此事こじある。公劉こうりゆうの于索たぐ于囊のうといへる則すなは旅行りょぎんの事ことなり。駝たハ汎ひんく六畜りくちく小物せうぶつを負おハす。の稱せうか。漢書かんしよハ駝たを伴たハ作さく一馬いちばを以もつて自じら伴た負おをり。趙充國てうちゆうこくの傳でんハ云いハ。ハ索たぐ駝たの名なハ此獸このけう牛うし非ひ也や。馬まハあ。と徒勁たけんの性質せいかうハ遠方えんほうハ物ぶつ負おハせせ搬運はんえんキキむるの義ぎと志しる一一。

駝たとはうアとて索駝たぐたのあとある。すハ揚やう見けんキキ知しへ。いま荷物にものつを幾駝いくたの則すなは駝たといふも索駝たぐたなりきたるなり。駝たハ絶たつ駝たと関かんらると。○唐たうの懿宗いそう咸通かんどう十二年じふにねん同昌どうしやう公主こうしゆを美み時とき其その柁たてと昇のぼりて夫その海餅かいひやう餓が平へい索駝たぐたを賜たまはり。是後このち世稱よせせう謂いハ下した。和名類聚わなみれいよ鈔しやう云い駝駝たた注しゆ洛陀らくたの二音におん良久らうきう太乃たの字萬まと

ア了りやう是名しな稱せうを何なにやま保たも。

日本書紀にほんしよき推古すいこ紀き云いく七季しちき秋あき九月くわがつ癸亥みづのへ朔しやく百濟ひやくせい國こくより。駝駝たた一疋いっしやく驢ろ一疋いっしやくを貢たまへ。又また同どう北きた六年ろくにん秋あき八月はちがつ癸酉みづのとり朔しやく高麗こうらいより隋ずいの俘虜ふりよと土物つちもの駝駝たた一疋いっしやくを獻けん。

又また齊明せいめい紀き三年さんねん九月くわがつ癸酉みづのとり朔しやく西海せいかいの使し某たがひ々々名な百濟ひやくせいより還かへり。駝た一箇いっかん驢ろ二箇にっかんを獻けん。韓保かんぼ日にち月げつ也や。此この駝た漢かん書しよに考かうへり。

和名抄わなみせう周書しゆしよを引ひて曰い駝駝たた有肉鞍うにくあん云い注しゆ云い駝たハ即すなは駝た乃字たの驢ろ音おんハ卓たつ字し中ちゆう駝たハつくる即すなは駝た有あとあるハ大おほ小せう訛あやまり。先まづ驢ろの字し馬まハ従したがハ駝たの字しよ遷うつりて誤あやまる前まへ子こ辨べんをる如ごと一索囊いっさくのうの索たぐなれば馬うまハい摺すり止とどまし扱駝さくた駝たと同どうトハ充ちゆう飛ひなり。駝たハい白しろき馬うまの鬣はげ黒くろきを云い詩しの小雅せうがに

索駝考

嘽々駱馬たんとくらくば。四牡しむ。又我馬維駱またわれまゐらむ。皇々きうきう者しや。禮記にも駱馬黒らいきにもらくまこく

○字書不就考也。駱の字に驢父牛母ろふしうぼ。駱も驢也。牝牡異めいしやうい。駱と

即索駱の索と同じとあり。諸書不しよしよ。形状を云々。惣體ハ馬にしやうたいをいふ

似たり。或ハ頭身あたまみ。頭ハ羊に似て長き頂あたま。耳脚みみあしに三さん

節ふし。三つ一たし。脊せきに西肉峰さいにくほう。即肉鞍すくと云いふ。形状ハ銅駱しやうたいはどうらく

今見る処を以てをいまみるところをもち。尾ハ牛の如くして上の齒うわのは。董子の云とうしよのいひ

角つの。角ハ上齒つのあは。此言も董子このいひもとうしよ。董子とうしよ考也。ハ牛の鬐しん

らん。爆牛はくぎうかとの名も何な。然定しかんてい。宜よろ。亦また。既すで。羊首しやうしゆか

馬身ばみん。別べつ。一物いちぶつと云いふ。左傳さでん。鞭むちの長なが。馬腹ばはら。及およ

脊せき。肉隆にくたか。起おこ。故ゆゑに肉峯にくほう。封牛ふうしゆの名な。封ふう。土つちと高たか

積つみたるなり。又人の戚施せきし如ごと。故ゆゑ不せし。偃えん者しやを形容けいようして
駱背らくはいと云いふなり。柳宗元りゆうしゆげんの文ぶん。種しゆ。楸しゆ。郭かく。索さく。駱らくの傳でん。何なに。則すなは。偃えん
儻たうの人ひとを云いふ。

○毛色けいしきと蒼褐そうこく黄紫わうし多おほ。一ひと。白しろも黒くろも何なに。希まれなる下した。

其毛そのけと用もちて種しゆ。襦しゆ。不ふ。温おん。厚こう。不ふ。一ひと。狐こ。貉らく。不ふ。一ひと。煖あひ

なり。性せい。寒かん。不ふ。耐た。暑しよ。を惡にくむ。夏あつ。一ひと。毛け。不ふ。落おち。尚しやう。書しよ。不ふ

渭ゑい。不ふ。鳥とり。獸じゆ。と希まれ。革かく。と一ひと。時とき。節せつ。此この。駱らく。類るい。の毛け。を緝しやく。めて罽けい。毼てん

○野駱やらくと家駱からくとの別べつ。何なに。按おん。る。野や。駱らく。と。此この。水みづ。を負おん。擔たん。用もち。い

て家駱からくと食餌しょくじ。藥やく。用もち。充あつ。不ふ。也や。家駱からく。の肉にく。鞍あん。と蹄つひ。のの。まま。ハ。肉にく。城じやう

糟そう。漬じ。り。て食しょく。味あじ。甚おほ。脆せき。美み。なり。又また。肉にく。鞍あん。の中ちゆう。有あ。る。臍せき。を駱らく

索駱考

脂すこハ峯子油といひ薬用ふも是と野駝を勝まうとも扱其
 肉身甘温無毒うて能五金金銀銅を柔まう。食すハ痺風瘡
 腫を治し筋皮の攣縮等う効あり外う駝乳駝黄駝毛としに
 主治す所処あり尿ハ乳一研して鼻う嚙へハ血を止む又これと
 薰灼をまハ蚊蟲をまろし是と烽火に用いて狼糞に同トと云。
 峯成云曾テ聞ク 峯駝ノ蛮名峯
 一峯ヲカノヨリト云 峯駝ノ類身ノ長九尺餘うて色鹿
 双峯ヲトロンカ 駝ハ天竺等の國う多し二種ありハクトリヤ國産と亞臘比亞此
 リ云ト云又峯蘭 國産とかハアアハクトリヤの産ハ脊上に肉山ニ有テトロネテリスに
 本草書ノウキニ 同し。亞臘比亞の産と唯一山あり。又胸う大ぢ肉塊ありて能
 駝ノ説アリト 自ら五体を載せて休息をまうし二種ともう何とと上齒なり。七
 イハ氏アリニウス 峯駝ノ説アリト

人まう馬う代へ荷を負せ又軍中も是も兼其健なる
 馬に等し又背上一負う荷分外も重きと道も格別不遠をハ半
 て起む其性馬を惡し又能馬を恐まうし。シカルタ國合戦のとき
 國人駝を用い敵の馬を其女ふおとろき其形ふおとて安ん
 を止むと成得て歩戦をといふ。駝の背上一弓を
 又説ふ駝ヲ壽ハ五十歳を度とて百歳う至るとあり。好て濁
 水と飲む飲する四日うて渴せ。足と軟柔うて崑石を踏むこと
 久しき耐へ。腦を酥ふ和して吞めハ癩癩を治す膽も同一尿
 ハ水腫を治す常乳の再孕に至て止む。アリヤスの名曰駝ハ
 畜類おとも親子交合の耻まを知る昔駝を中ふる者あり目と掩
 い欺きて母子交らうめハ後に覺て大々悲り主人を嚙殺うたりと。

峯駝考

四

都を東晋宋齊梁陳と云ふ。是れ南少の村北魏と拓跋氏の戎中へ南と正統と見て名付らる。今茲に云ふ。姑く世の汎稱に従て。隋唐よりしてハ中國も多くなると畜魏晋以後の事とす。唐よりしてハ中國も多くなると畜養して牛馬同様用ひらるん唐の村ハ最おなくこれを用ひる末に委くせり。

東晋の亂よりして中國華復の地もハ腥羯の棲となす。其因は原く処ハ漢魏以來羌胡北降する者ハ塞外中國の諸郡へ居住せしめしるゆへ是より種類を以て遂に晋の天下を魚爛するに至る先劉淵を匈奴を晋陽に據り漢と號し石勒と胡羯を。上黨に據り趙と號し姚氏と羌を。符氏と氏を。慕容ハ鮮卑を。ハハハ五胡十六國の亂とい是なり。郭欽は戎狄と塞外へ歸を

歸をの既江統は戎を徙をの論載せて晉書に戎見く其事を曉る。此時節よりして畜産の類もてハ四裔の異種を中國へ遷して用ゆる根に成るる原に素駝の牛馬と並用らる

東晋以後より始ならん

○蘇秦は楚に威王を説く。詳不後に。戎考にハ鄭衛の妙音み人と趙代の良馬素駝と並稱を。例の利口捷給より楚王の欲不投を説く。方々とも良馬の例をせり。軍國運漕の用と亦趙代より専らえれ。用と。代に北狄に近りとも其國にのほら素駝を牛して是と慣れ使ひらる。然しは裔夷の手録にハ非して固より軍國服役に用畜を。と我國の古よりして既

孟子の言、海内の地方千里の者九つとある、八代を以て入とす、
孟子の言、海内の地方千里の者九つとある、八代を以て入とす、
孟子の言、海内の地方千里の者九つとある、八代を以て入とす、

○夏の禹王洪水を治めて高山大川を列し天下の貢賦を定めらる。
禹貢の一書、小経済の大體を記し、其貢賦の物、禽獸ハ載せ
らる、是ハ珍禽奇獸ハ家畜の畜はるの法、由りて禹王の書、
稱する山海經、詳ふ未だ、ハ索駝を記して北方北山、多とす
也。

○殷の湯王の時、伊尹宰相として我狄の政と議せらる、中、
北狄の種類十三國の名を擧て索駝何何と貢獻せんと請ふ
あり、彼此を合せ考ふ、索駝ハ種類ハ古、北狄寒凪の地方、生
せしとも、覺ゆ、性、寒、不、耐、暑、然、ま、と、其、後、ハ、種、類、蕃、息、し、て、西、方、に、

南方より生ず、遂に中國の用物とも成り、
南方より生ず、遂に中國の用物とも成り、

○此獸、軀幹巨大、且、佛能あり、是、我、狄、の、産、る、所、以、なり、中
國々、天地中和の氣の鍾る所、有、國、に、中、を、
格別、殊大あり、都て物の瑰奇偉大なり、天地の偏氣を
先、中國と、四、裔、に、比、す、ん、ハ、至、り、小、なる、事、なり、是、も、道、理、の、
註、周の言に、中國の天地、おるること、稊米の大倉、不、存、如、
と云も、証、安、ハ、非、を、さ、て、物、の、精、粹、菁、華、ハ、少、く、し、て、渣、滓、糟、粕、
ハ、多、く、中國々、精、粹、なる、菁、華、なる、四、裔、ハ、渣、滓、なる、糟、粕、な
り、故、り、地、も、廣、大、なり、て、物、産、も、瑰、偉、なる、と、也、と、索、駝、の、如、き、
也。

○儲この索駝、北狄、山海經、周書、戰國策、
に生ず、又、西戎、穆天子傳、西
戎傳、廣志

索駝考

に生一。又南方西域。郭景純爾雅の註に「にも生一。互寒の地也。」
暑熱壯地也も生るハ種類の滋息蕃殖せりや。特に東夷ハ見へる。如何と思惟するに。禹貢壯卷未に統轄せらるに。東
ハ海有て東方ハ極海多きことなり。是も世界の裔也
しる地也ハ海中ニ鯨鯢の如き大魚と出ず。猶西北ハ律大
の禽獸を産す。亦如法苑珠林ハ一山中の人も魚の大さ本の
如きあふを知ら海上の人ハ木の大さ魚の如きあるを信せ。六
とあふを四裔の地ハ瑰異の物を生す。天地自然の數あり
と知ら足らり。

○段成式唐李時珍明此言ふハ明駝と云ハ駝の性蓋明俗
の目翳かるまにて臥をに腹を地ハ著け足を屈うて腹下より日光漏

と露はるとハ夜壯且と知ら則お出て夫より行くこと千里と
云へ樂史唐云處とハ異なり。未詳何れ是をと云ふ。

宋人夜雪の持て雪眼蓋明夜轉飛とあふを魏菊莊詩
人玉屑に羞明と俗語と而已なり。羞明と字の如く明を
羞むの義也。眼を病む者の暗黒の處を好むて明白の地とハ
厭いにくむの義なり。余著錦綉段批釋子此詩を論をけり。

右小録す也と下す引く諸書の大梗を括して加らに臆說
私論を以て必を下文の引證を得事實明白うつす譚
柄ともに足らり。此体裁と韓非子の内外儲說の例なり。
觀覽記臆便しもハ下文と重複するに似らずを研ること勿し。

○引證并考覈

○山海經卷三云又北單孤の山三百八十里を錦山と云其陽

王多其陰ハ鏡多伊水に於て西なれ河不注其獸

索駝をほし北山郭璞曰肉鞍あり能流沙中をゆく日に行く

三百里其負こと千斤水泉の何ふ処と知不

羅端良曰駝ハ外國の奇畜古培今云駱駝と云索

ハ囊あり他も負荷あり此漢書の注を顔師今云駱駝

索音の轉なり眼の字時珍吳任臣山海經の廣注ハ引

證宏博なりも羅願此説を駁して封牛と索駝とを別物と

るハ透脱ならざる見後あり

它山按るに漢書藝文志ハ山海經十三卷形法六家の首なり

作者の姓名を録せし世にこれを夏禹の書とするハ誕妄甚

前賢をして此義を辨明せしハ更しつと其古書あるを以て

まづこれを掲ぐ而已さて索駝の典故を求るに唐の政陽詢

藝文類聚明の俞安期唐類函近時清康熙帝淵饒高類

函等に及ぶ其書採収せし富贍かきと疎脱紕繆も殊ふ

多一旨衆旨を引く一隻眼を具するハ書ハ積り

○逸周書これを汲冢の書と云伊尹商書を献る孔晁曰周書な

ら録中類を以て相附と本文注文孔晁の字を漏して正北空同

大夏莎車姑他胡代狄匈奴樓煩月氏娥犁其龍東胡請て我

諸索駝白玉野馬駒駼駼を以て献するを為令湯曰善孔

注に十三國ハ北狄の別名なり代翟ハ西北界ふあり我狄間の別

名な王會

按るに此説不据也凡此十三種の北狄悉く此畜を産むるなり。其言ハ荒誕不經なるとも其書ハ古書なるとも是を班固二史に照せし西北の地方に索駝の種類を多く出せ事明白也周書王會ハ成王布政の記ありに中間ハ殷の世の事を附載す保ハ是逸史殘編なる故なり。

又按るに此云北狄の種名ハ漢の武帝の時ハ張騫傳ハ子等功あり始て中國を通さる國名も見中一笑了し。湯王聖人して尚秦皇漢武窮兵黷武の擧げりや。

○戰國策に蘇秦楚の威王に説て曰大王誠ハ能臣ハ愚計を用いは鄭衛の妙音美人ハ必く後宮に充て趙代の索駝良馬ハ

必く外既了實人。卷五楚策 威王の答

此論と前ハ出せ類函誤り史記蘇秦傳とも疎繆斯の如し。史記本傳ハ此事なり。

○東方朔云腰裏奔亡して索駝を騰駕也。七竅王逸云は收て楚辞中ハ入る引て楚辞とあるハ疎云下。

○楊雄云聖武勃興して穹廬を破り沙幕を腦す。余吾を髓に。遂尔王庭に躡へ索駝を駆る。長楊の賦 漢谷不出と也 顔籀此交ハ注と加へ也

○漢書に云匈奴其先夏后氏の苗裔を淳維と云唐虞以上山戎獫狁薰粥阿又北邊ハ居尔其畜の多き所也則馬牛羊其奇畜ハ則索駝驢騾駒駘駃騠驢矣。匈奴 師古云索駝ハ能く索囊を負て物を駄とると云なり。

索駝考

按るに索駝の義まさしに顔師古の此注とて正解とあり
一。歐陽詢俞安期輩よく漢書と引くことを知て此ふ
及ハ子孫ハ何とや。

○又云鄯善國本名ハ樓蘭水草と逐ハ驢馬あり。索它おハ一。
西域傳

○又云烏孫國の大昆彌西方より入リ右谷蠡王の庭に至リ。
單于の父行と馬牛羊驢索駝とを獲たり。西域傳

○東觀漢記に云河西の太守竇融使と遣ハテ。索駝と獻を。
又南單于上書して索駝と獻を。單于とく龍祠に於て索
駝と聞ハメテ樂事と云也。後漢書に云匈奴の祭祠あり。正月の戌日に
天竺の國に於て清都龍祠あり。馬を以て駝と走らしめ

○白孔六帖に云西域龜茲歲朝ハ索駝と聞ハメ。勝負を觀

て以て歳の盈虚を卜也。

按るに和漢三才圖繪ハ吉慈厄國畜産駝馬多しとあり。
即龜茲あるハ音近き故に訛る。

○又云五代回紇索駝を以て耕して種也。又云南蛮の牛駝豹也。
○廣志釋義に云索駝と天竺國より出リ。又天竺より北の

方に索駝多し

佛說賢愚に云波羅奈國王夢ハ金毛の異獸を見て獵師ハ
命ハ山ハ入テ求む得ずハ罪あり。天熱して死せんとす。銘

駝獸と云あり。見て驚ハ獵夫を召テ清池ハ至リ涼を
得テ甦リ。獸を見ハ金毛を乞とも殺をに忍ハズ。
獸とて。人語をハ獵師ハ喻ハ皮を施してこれ手與。

索駝考

身肉ハ諸の禽虫の類ヲ施シ王皮を得て褥とあそ。獸と
こま佛とろく身肉を受る者ハ。八萬諸天の法と肉者と
まな。義楚六〇法苑珠林卷第六。法苑珠林卷第六。身肉受る者ハ。八萬諸天の法と肉者と。但水草と合て餘る所。
又百喻經ヲ載する駝の皮を愛し。雨濕と防とて。白氈ハカマト
てまじ覆ひしと。駝の皮を剥んに刀鈍し砥に磨せん
とまじハ身ハ樓上トあり下子に嬾し。因て駝と砥と城樓
へ上げしと。甕の中の穀を。一駝ハ食し其首甕口に
竿コシトを。駝を斫て甕と完せんと云しと。共六皆此喻
あまとも。近く取リ譬るに駝を以てまじハ。其多きと知
る不足也。
增壹阿含經云比丘僧の乱想と除き去ること。惡象駝

駝牛馬鹿狼狗蛇蚊の如く。當り遠く離る。下。卷の三
十四に

○開寶本草ノ載也。駝ハ索駝駝馬志宋の曰野駝家駝と塞
北河西ノ生也。蘓頌亦宋曰野駝ハ今た西北番界にあ
り。家駝ハ則人家中ノ畜養生息するものなり。

按るに索駝ハ駝ト別物ト非也。辨まへり見へり。然も
とも馬氏別物トを係時ハ。野駝トハ索負の物トて家
駝ト駝屠宰の者トをまじへり。蘓頌の云処を見しと
宋の時ハ駝ト牛羊ト同一ト牽養し食啖シかせしと彰
然シり

○後漢書云東離國ハ天竺の東南に在る大國なり。土氣物
類天竺ト同一。家ハ駝トに乘り隣國ト往来也。西域傳

索駝考
東野考

○華嶠漢書云南單于使遣一闕爾至藩臣稱一。入て雲中に居て上書して駱駝二頭文馬十疋を献て。

○韓退之此詩に云如此至寶存豈多らんや。璽に苞ひ席を裹いて可立致十鼓祗致數駱駝とある。唐の歌の考へて

○唐書云田緡の李于復綏銀の節度使に拜せらる。復開元北宥州城て冠賊の路を扼し橐駝を進めて蔡を伐て助

を載せて范陽に貯へ積て丘山の如し。史思明ちを取らんと欲て云云。史思明傳

又云貞元の初開輔北宥兵飛龍名。北駝を以て永豊倉の米を負して禁軍に給て。食貨志

又童謠と載せて神童の曰山南烏鵲の窠山北金駱駝。鐙柯孔を鑿せし。介子柯を施すと。此二句より山南云云ハ。唐よりして烏鵲其都に窠窠とあさんと也。山北云

云ハ蛮夷中國を侵入て大に虜獲し駱駝を重載して去らんの識あり。五行志

按るに以上は數事不説て之を觀て。下は引明駝の糸小因て考まら。李唐の世もて殊に橐駝を多く養ひ牛馬と同じく用ひ事明晰あり。是ハ唐北時回紇と交通し。回紇ハ橐駝を以て耕作をなす。程に多く此畜

を養ふ事なまは。時々回紇を貢す。又唐よりも求め
徴して中國より用ふるならん。六典にも駝馬を献す
る時ハ。唐堂に陳すふの文あり。是より回紇の歳時ハ此
獸を貢獻して匱けらるる家を知りて是なり。六典にも
九駝牛ハ日し一藁各一圍塩三合を給むと云文もあり。
是より索駝を多く畜け置けりをも知りて是なり。
玄宗晩季楊貴妃の色に溺き天下大亂也安祿山叛謀
して西京覆没せしむハ。肅宗靈武に即位あり。義兵を
徴さると雖賊の強大を敵し難く遂に回紇へ援兵を乞
ふ。天下恢復の日西京に金帛財寶ハ回紇の得分し約せ
らる。故に克復の功ハ速に成るれとも災を後子貽むも

勘うらむ。扱此時より益回紇と往來聘問繁くあり也。

○外國紀畧云大秦國ハ人の長一丈五尺好て駝馬一騎を
唐類函

按るに後漢書西域傳に大秦國あり云く其人皆長大
安息天竺と海中に交易をなすと。

○我攬夷諺に云亞臘皮亞地氣きハめて温熱なりて此地ハ
一種の藥物を出し暁死翳て死する。人の肉の集り燻き
の化する処諸疾に之効驗あり。即輕錄に載く金銀寶
石珍珠獅子駝馬を産む。卷の三

亞臘皮亞ハ亞刺比亞も作子。四大洲の中より亞
細亞のりてあり。是駝馬の極熱の地にも生をふあり。

○又云恩魯謨斯此地草木多。其地の牛羊駝馬。其地ハ肉山一ツ。魚を食ふ。同上。此國也。

裁攬夷諺ハ奇唇な。古き刻行本にて。明人の譯を原書。嚼蘭の説象胥の言まで。信をへきとハ採録せし唇な

○西域聞見録云捷拉巴哈台也。また準噶爾。即烏魯の故地。是は摸搜の言ハ非也。

○西域聞見録ハ清の七十一号。構園と云。別の著と云。乾隆帝の治時。西邊を拓き。始末を詳し記を。記載典雅。て。一部の好書なり。

○又云土爾番復ハ極めたふ炎熱して。炎風地を西て起る。冬日ハ祁寒大雪なり。南ハ云々。戈壁と云。碎砂乱石なり。水草なきの地なり。野駝野馬の類ハ百千群をかき。卷の二。是と云々。炎熱の地。駝馬を生するなり。裁攬夷諺云。處と相符同也。

○又云庫車ハ大兵征伐。二十一年。これを圍まる。時。城中。只

索駝考

五

羊七隻牛二頭有り。底定たり。以来滋養生息して。貧苦の小
回と雖も。同様に。よと牛羊駝馬あり。上に同

○又云烏什阿克蘇ハ回子ノ一大城なり。土田廣沃して。牛
羊駝馬ゆく処群とあり。上に同

○又云哈薩克ハ古ノ大宛なり。地ハ平岡漫嶺おろく。草生し
て野不被る。牲畜牛羊ノことを食て腓字一易し。宴會し駝
馬牛羊を以て饌とす。馬運と酒とあり。卷ノ三

○又云土爾扈特ノ準噶爾ノためし。逼らきて。其部落と率い
て。鄂羅斯ノ入る。鄂羅斯ノ額濟爾ノ地方を予へ。遊牧
せしむ。烏巴錫。河ノ名。に至り。既し七世休養生息して。駝馬
牛羊あげて計しへうらさるに至る。卷ノ六

○漢書云。罽賓國ハ戸口勝兵あり。大國なり。封牛水牛象
大狗沐猴と出。師古曰。封牛ハ頂ノ上ノ隆く起る者なり。
西域傳ノ上ノ下ノ引

按るに大月氏一封索駝也。師古曰。脊上し一封あり也。
封トハ其隆高なること。封土ノ如くあり。今俗呼て封
牛とあり。云云。彼ト此ト弁せ見。ハ索駝ト封牛トハ共
一物なり。別種ト非し。事明白なり。郭璞
依違模倣ノ説を見て。岐して二物とふ。是ハ達識ノ士に
非ざるや。非ざるや。

○後漢書云。條支國周回四十餘里。西海に臨む。海水曲り環
地暑濕なり。獅子犀牛封牛と出。西域傳

索駝考

六

太子賢封牛牛註下を下さま。是れを前書まて明くち。故文也。
と省け子のり。

爾雅釋獸云爆牛音ハ電郭璞曰即ち犂牛なり。領上
肉爆映して起ふこと二尺あり。狀ハ索駝の如。肉鞍
一邊あり。健うに行もの八日一三百里今交州合浦徐閉縣
此牛と出を。牛屬

郭景純の說不よまハ。索駝と二物をとも。顏師古の言
明白にして疑ふへき。非を。辨ハ前見へり。爆映一
て起る云云爆映の義解難。它日を待て論をへり。

○穆天子傳小云天子三日文山遊乃良馬十駟用牛三百
守狗九十物牛音二百と獻子以て流沙とゆく。郭璞云。

此牛よく流沙中をゆくこと索駝の如。其の四

按る良犬七千物牛二百と既一其第二卷一出たとと

郭氏多見落して此處一注せるなり。
山海經周書王會解穆天子傳の譎怪荒誕一人の手に
出ふり如。然ことも古書一疑かるまハ姑取て引證
となま。

○司馬相如上林の賦小云墉窓施獺犂郭璞曰墉ハ墉牛領上
肉堆あり。即今の犂牛師古曰そかハ今の犂牛共一漢
傳

○本草綱目駝の条小西域傳云く俗呼て封牛とふ也。又墉
牛と云穆天子傳こまを物牛と云物ハお引く如く。物
索駝考

不作字の形似より故誤るなり下。吳任臣山海經の廣注にも物作る本草の訛を襲ふ。

按るに封爆妨牖と乳一音の轉なり。烈厲連の三字も乳音通なり。燭と潔と圭との三字も音通を是らの事ハ方密之ヲ通雅にて明くよる。余ハ記臆する而已を録をさ。此ハ封牛以下の名も皆一物にて均是索駝なるを城知ふ。

○博物志云燉煌は西流沙をりて外國へゆく。千餘里の中水なし。伏流の処あり人ハちるこく能ハと皆駱駝に乗て行くに。駱駝ハ水脈を知るゆへ其処に至るハ足を以て地を踏みて進ませ人其処を堀り穿て水を得る。以下引く。

ハ。索駝の性質の事ふる。

○後周書云曰鄯善ハ古の樓蘭國なり西北に流沙數百里あり。

又復日熱風多し行旅の患をなす云云。蘇の畧説の処に流。

○兩雅翼宋の羅頌云駝ハ外國の奇畜脊一兩峯なり鞍の如し其足三節物を負ふて千斤に至る云云。注同。

○埤雅著陸佃云駝毛縵ハ温厚にして狐貉よりも煖なり。云。既出也。古ハ冬皮を狐類に取て裘なり復毛を駝類に取て褐なり云云。

按るに褐と褐と同一。鼯鼯のたぐひにて毛席を云此本文小由也ハ。毛席ハ多し駝類の毛にて製するからハ。蘓子卿雪ヲ和して嚙と不梅毛字徳と同一。毛駝類の毛なり。

索駝考

大

一。駝毛ハ服一て益ありと本草見一。

○東西洋考明の張云啞齊ハ則蘇門答刺一名ハ蘇文達那

西洋の要會なり。物産ハ駝毛縛回宋のとき曾て外國より

献せし事あり卷の四

○本草綱目云駝の状馬の如し其頭ハ羊小似と云云

見へ蒼褐紫黄の數色あり其色と圓云其食と齒其卧

きに腹地不著け足を屈りて露明酒陽ハ漏あると明駝

と名つく最よく速きを行く明駝の狀ハ見出

按るに韓文第八卷云肥と推して牛羊ハ呼ハ實と

載せて駝圓と鳴。征蜀の蔣之翹曰圓ハハ轄切つ。音あ

圓ハ駝の鳴聲類ハ王安石詩駝の聲と圓と云

ハ候鯖録出た。

又爾雅釋獸牛小齒と云郭璞ハハ食の既久

く又出して嚙を云字書云齒も齒同牛小齒

と云羊小齒とハ麋鹿と云其名殊なり而已。

○字典駝の字の注引くところ博く諸書を采る悉く本書

を前引くと又爰録せと青海の北夏熱風の

云又前説同一。

正字通駝の條下引く處甚詳して故事を集録せる

○瑣碎録云駝峯かとむ者ハ齒老となり少く健うあ。

者ハ峯直。駝の齡百年とハ五十年及ふ若二引。

素駝考

九

て融を此地に獨峯の駝を産む。嶺の四。北史云一峰の黑駝
駝下子見へり。

○南史云滑國ハ車師の別種あり。兩脚の索駝あり。能く重
きを負ふて遠くゆく。以下に載るハ。異種と録す。

李時珍曰南史云云。諸家のいさへ閉さる所也。

○洽閔記云于闐に小鹿あり。角細くして長し。駝と交て子を
生む。風脚駝と云。日に行くと七百里。其疾き事風の如し。

顧野王之玉篇云駝駝ハ驢父牛母と集韻云ハ駝ハ即
索駝と何也。鹿と交て生むるハ其異種なること明也。
按るに前漢の西域傳に于闐國ハ何也とも。其地に馬と
生むる所の也。

○拾遺記云周の時に韓房と云。そのあり渠胥國より來り
玉駝を獻ふ。高さ五丈。

○異苑云西域荀夷國山上に石駝あり。腹下より水を出
す。金錢もよみ手て以て承とる。即便對過も。惟葫蘆ふて承
ふ。その則にこまを飲すと得とハ人をして身體淨香とて
仙とあらしむ。其國神秘して數をくへらる也。

玉駝石駝駝生物不や。刻鑄造製のものなり。や。文面し
明らあらむ。恐らくハ銅駝の屬かよへり。

○五代史云晋軍契丹を撃て大に敗る。德州にて車を喪ひ。
一の白駝に騎てこり。家。

○明皇雜錄云哥舒翰つねに青海に鎮む。路をてに遙遠嘗
索駝考

て使を遣へ。白駱駝に乗て事を奏せむ。白駱駝日下
くこと五百里。

○北史云迷密國西平元年使を遣へ一峯の黑駱駝を献
ふ。

○白孔六帖云南蛮寶利佛迦駱駝何。豹文。一犂角且
畊。且耒。名けて牛駱豹と云。

○西域見録云郭罕ハ西域回子の一國也。其人短小男
女ともに皆長二尺たり。羊高八尺九寸長。尺餘牛馬た
り。二尺不及。駱駝の大地の中國を驢の如し。駱駝の
椿園氏云是古の僬僥氏の裔。僬僥氏ハ家語に駱駝。
酉陽雜俎云木蘭篇ハ明駱千里脚多く誤て鳴の字作

る駱の卧をに地不帖けて足を屈せを漏明かきハ。則ゆる
こと千里

○又云唐の時置驛。駟つぎのハ明駱使を置く。邊塞の軍機ハ
非さ。ハ擅ハ。駟を。駟事を。あ。ん。ん。

○楊妃外傳。唐史云明皇の時交趾より瑞龍腦香を貢。玄
宗貴妃ハ十杖を賜ハる。貴如私。明駱使を發。三杖を持
して。祿山。范陽に在。也。不遺。明駱腹下。毛。何。夜。よく
明々。な。り。

此説小よ。ハ。明駱ハ。腹下の毛。光耀を。發。不。因。て
明駱と稱。不。也。佛の額。白毫。あ。り。是。よ。光明を。發。
不。不。閉。了。駱馬の腹。一。様。の。看。を。做。ハ。奇。る。う。か

索駱考

三

○南齊書云。托跋氏の泰始五年萬民の位と宏升了讓ふ。
 建武二年明帝の托跋氏を伐つて鎮南將軍王廣之司州不出。
 右僕射沈文季豫州不出。宏自ら衆を率い壽陽に至る。軍
 中黒糧の行殿あり。二十人と容不。鎮騎羣をかむ。牛車及
 い駱駝軍資を載む。妓女三十許萬人城を攻む。八公山に
 登りて詩を賦して去る。魏虜傳云。以下引く。処ハ。
 ○後魏書云。高祖元。洛水を飲未も嘗て千里足の明駱を以
 て。更互に恒州に向て水を取て饌に供む。
 ○齊志云。天保の末。人をして此寺竹林に往て經函を
 取らむ。使者去らざるを辞む。文宣高曰。我駱駝に乗て
 行ハ自ら到ん。使者如此して果して一寺門あり。數僧謂て

曰。高洋の駱駝きとる也。とて。使者不問。爾の天子何を
 求む。因て吞入。經函并に尺八の黄帕を取らむ。僧命して
 取て與ふ。後其地を尋ぬるに又見へむ。高僧傳云。載む。
 ○太平寰宇記。新史云。周宇文の世。祖濠を征す。に夜兵を
 つら。炬を持し駱駝のて。淮濠をよ。不渡らむ。
 敵をせろきて。鬼魅の龍不乘。厚とふ。大小敗不遂。其地
 を龍州と名付らる。
 ○三水小牘云。乾符中。劉秉仁江州の刺史とむ。洛を駱
 駝を將いて郡不至。因て風して廬山のもとに逸む。南土
 不ハ此畜あり。人見て大驚。徒を集めて是を射。終を乃
 其首を州へ白して曰。廬山の精を得と。劉公其事を訝

索駱考

既^き至^し不^ふを見^みく^く愀^し然^んとして^て曰^いふ^は吾^わ索^{さく}駝^た也^{なり}とて^て命^{いのち}して^て
江^え壩^ば不^ふ瘞^しめ^めし^しむ。

按^あるに風^{かぜ}とハ放^{はな}た^た逸^{いつ}す^る事^{こと}な^りて^て周^{しゅう}書^{しよ}の費^ひ誓^{せい}不^ふ馬^ば牛^{ぎゆう}其^{その}
風^{かぜ}とあ^りて^て左^さ傳^{でん}僖^き公^{こう}四^{よん}年^{ねん}不^ふ風^{かぜ}馬^ば牛^{ぎゆう}も相^あ及^{およ}ぶ^るとあ^りて^て風^{かぜ}
の字^じな^りて^て五^ご雜^{ざつ}俎^そに^に小^{せう}兒^に風^{かぜ}の^のとあ^りて^て卷^まき^くと^と同^{おな}じ^じと^と
ら^らむ。

哀^あ公^{こう}十^{じゅう}四^し年^{ねん}春^{はる}西^{せい}の^の大^{だい}野^や不^ふ狩^{しゆ}して^て叔^{しやく}孫^{そん}子^しの^の車^{くるま}子^し組^{ぐみ}
商^{しょう}麟^{りん}を^を獲^とり^て不^ふ祥^{しやう}の^の物^{もの}と^とあ^りて^て虞^よ人^{にん}に^に賜^{たま}ふ^る孔子^{こうし}あ^りて^て
を^を觀^みて^て曰^いふ^は麟^{りん}な^りて^て左^さ傳^{でん}孔子^{こうし}袂^{たもと}を^を以^もて^て面^{おもて}を^を掩^{おほ}ひ^て泣^ないて^て曰^いふ^は吾^わ
道^{だう}窮^{きゆう}せ^りて^て穀^{こく}梁^{りやう}韓^{かん}昌^{しやう}黎^り曰^いふ^は惟^{ただ}麟^{りん}知^し不^ふへ^るの^のら^らむ^も則^{すなは}ち^ちを^を不^ふ
祥^{しやう}と^と云^いふ^も亦^{また}宜^{なり}し^し

○ 閑^{かん}窓^{そう}括^{くわく}異^い志^し。應^{おう}龍^{りゆう}の^の魯^ろ不^ふ云^い王^{わう}洙^{しゆ}暑^{しよ}と^と神^{しん}廟^{ぼう}不^ふ避^ひく^る。一^{いつ}の^の老^{らう}人^{にん}の^の
背^{せい}即^{すなは}ち^ち儻^{たう}者^{しや}の^の脅^{おそ}の^の処^{ところ}の^のを^をま^まて^て白^{しろ}く^くな^なり^て見^みる^る。明^{めい}日^{にち}
子^しな^なり^て是^{こゝ}を^を見^みし^てハ^ハ乃^{すなは}ち^ち索^{さく}駝^たな^り。昨^{けつ}夜^や見^みる^るハ^ハ其^{その}精^{せい}なる^る
へ^へ。

字典^{じえん}駝^たの^の注^{ちゆう}不^ふ又^{また}背^{せい}儻^{たう}な^り。柳^{りゆう}子^し厚^{こう}郭^{かく}索^{さく}駝^たの^の注^{ちゆう}人^{にん}背^{せい}駝^た
して^て仰^{おほ}ぐ^くこと^と能^{あた}ハ^ハし^しと^と云^いふ^も又^{また}佗^たも^も作^{つく}る^る。莊^{しやう}子^し德^{とく}充^{ちゆう}符^ふ
の^の哀^あ駝^た佗^た成^{せい}女^{にょ}英^{えい}が^が疏^{しよ}に^に佗^た駝^たと^と同^{おな}じ^じ背^{せい}儻^{たう}な^り。按^あす^す
不^ふ新^{しん}臺^{たい}の^の詩^し不^ふ戚^{せき}施^し。魯^ろ語^ごに^にし^し則^{すなは}ち^ち駝^た背^{せい}な^り。
○ 成^{せい}自^じ盧^ろ渭^ゐ南^{なん}よ^よ。晚^{ばん}に^に東^{とう}陽^{やう}驛^{えき}不^ふ過^かて^て雪^{ゆき}に^に遇^あふ^る。佛^{ぶつ}窟^{くつ}に^に宿^{しゆく}る。
老^{らう}僧^{そう}あ^りて^て夜^よ詩^しを^を吟^{ぎん}じて^て曰^いふ^は褐^{こつ}を^を擁^{よう}し^て名^なを^を藏^{かく}し^て定^{てい}蹤^{そう}お^し。流^{りゆう}
沙^さ千^{せん}里^り哀^あ容^{よう}と^とい^ふ。南^{なん}宗^{しゆう}の^の心^{しん}地^ちを^を傳^{でん}得^{とく}る^るの^の後^{のち}此^{こゝ}身^みま^まと

索駝考

廿

に便ち雙峯子老へし。明旦庭を視まハ。一老駝を畜へし

○虞孝仁性奢華。丁代遼の役。駝を以て函を載せ。水と

盛魚を養て自ら給を。又孫承祐も太宗の北伐に従ふ

駝を以て大函をハハ。魚を養て自ら隨ふ

○清明投牽録云。駝坊。使臣より坐して戶外の偶語を聞

に曰。舍人きたる日。萬里の役あるへし。然れども遂ふ此苦を

免さん。吾もさうに奈何をへき。答ていふ。諫議自ら寛せよ。適

自ら免さん而已と。使臣いりり。是を見まハ。庭中の二駝

なる。次早不命有て一駝を差して軍衣を載せて蜀へ入ら

しめ。竟る蜀中不死せし。

○輟耕録云。白湛淵先生が續演雅十詩の中云。兩駝雪を

待て立り。終日飢て起を。一覺沙日黄。肉屏何ぞ擬す。尿に

足んと。是ハ沙漠もて雪盛なり。時二の駝と身の左右へ。跋

立せしめ。晝夜動くことか。断梗を以て兩駝の上へ架し。

其上へ毛席の類を掛け寒氣を凌ぐに。其煖う。不事肉屏

に勝す。且心兵と起さず。尿の丸

肉屏とハ。唐の申王の故事。婦女を多くあつめ。坐を圍ま

し。むるなり。心兵とハ。慾情の起ふと云。

○西域閑見録云。克什米爾ハ。回子の一。大國あり。葉爾羌よ

り。西南馬行六十餘日にして至る。其國中一氷山を

隔つ。人畜うに到て。主人の駝牽を須て過る事を得ず。

素駝考

其

了。卷の五

此説を見よ。氷山を踏中。にも。人も牛馬のたぐひも
ても。駝馬の脊を負はしめて渉るに似たり。

○西隣紀事云。布拉克霍集占叛謀の時。上天子將軍雅爾
哈善命。土魯番より兵をもちて往く。一日薄暮。城中

小駝の鳴く色きこゆ。重を負ひ遠く行ふ似たり。霍集占迷
き本る心なるへして。潜り將軍を告ぐ云云。卷の六

○回疆風土記云。開齋の朝。賀の日。阿奇木伯克宰相の
鮮衣怒馬。金糸黄の阿渾帽を云々。帽の名なり。下衣服の制

服より。若を云。猶士君子と云。如。駝馬の飾は錦

靴と以てを。靴の七

按るに。是を駝馬を以て。函簿行列の供連と云。也。駝小
肉靴あり。然るに靴をハ如何載る。其制知へうらむ。

○又云。田子の宴會ハ。總て多く畜牲を殺を以て敬とを。
駝馬牛ともに上品とを。羊或ハ數百隻といふ。尿。上に同

按るに。如此なまむ。駝馬をハ。服任負擔も用ひ。又屠宰
して食餌ともかき。回々の地方ハ。駝馬の多きを知らず
足とす。

○雜録云。穆爾爾氷を達坂山と云。氷山ハ伊犁烏什の
あり。南北の兩路緊要必由。孔道也。克噶察哈尔
台より南行して。雪海あり。復も氷雪泥濘して。人も

索駝考

共六

牛馬も山坂側嶺羊腸曲徑くも過く一たひ足と失へハ。海中へ陥入るなり。うと打越して二十里にして即氷山なり。土沙もなく草木もなく。在在に氷而已なり。氷の厚も其幾何尋丈と云と知らず。裂て隙の有る所より下の方を視まハ正黒くして其底を見む。水流の声も雷に轟く如し。土地の人かの裂隙の処へ駝馬の骨と横く巨して初て足を措き其所を踰ゆ。事を得ずなり。

按るに。孔道ハ班史の西域傳に見へたり。穴を穿ちて道をつけたる処を云張騫が傳史の鑿空と相類む。索駝ハ固より珍禽奇獸の玩弄物。非も重と負ひ遠くゆき。勞と助け力と竭む。其能くも偉なり。況や枯骨に至

りて。猶其用をおこし此の如きをや。古人千金を以て駝馬の骨を買ふこと。良し所以あふ哉記して一慨を付

○附銅駝

漢以来長安の城門に在る銅駝也。赤金を以て鑄象せよ。おとハ生類と相関りらむ。然と雖類書索駝の部に。こも戎収采を敷時ハ措て論考せさふも闕典に近く。遺憾なきも非む。今諸書を援引して其始末を記す。こも亦稽古の一端なるへ

○洛中記云銅駝二枚宮の南四會道。則十字街頭。頭不在。高さ九尺頭ハ羊に似たり。頸身馬に似たり。肉鞍あり。兩筒相對

索駝考

甚

も。按る。是ハ魏の明帝の更め鑄所の物なる一

○鄴中記陸翽云二銅駝馬形如一長一丈高一丈足

牛の如く尾の長さ二尺脊ハ馬鞍の如く中陽門外一在。道を夾て相向へり。按るに是ハ晋の時石季龍の徙せ

所の物ある一

○通鑑景初元年魏明帝冬十月長安の鐘簾索駝銅人承露盤

を洛陽一徙を盤折と聲數十里一閉。銅人重くして致をへりらる。大ハ銅を鼓して銅人二を鑄る。翁仲一云司馬門一列坐を

通鑑の注一云始皇鑄所の銅索駝一なり。此説疑ハへ。按るに史記始皇二十六年天下の兵を収め一を咸

陽一聚めて銷して鐘簾金人十二を作る。重さ各千斤

宮中一置く。紀一始皇金人一を鑄と一も。いま一索駝を

鑄とる事一通鑑の注頗一杜撰臆度一に似たり。漢書五行志一云始皇二十六年大人あり長五丈足履

六尺九十二人臨洮一見一る。故兵器を銷して一象

とる。卷下一三輔舊事一云天下の兵器を銷して銅人十

二を鑄る各重さ二十四萬斤漢世長樂宮門一あり。魏志に云銅人十一お一銅鑛を椎破して小錢を鑄一董卓

関中記一云董卓銅人十二を壞て清門裏一徙を。魏明帝洛一詣らんと一載せて霸城一至る重くして致をへりらる。後石季龍一を鄴一徙を一并堅又一つて

索駝考

廿

長安に入てこまを銷す。凡此諸書一言も銅駝の事
及ふものあり。後漢書云薊子訓ハ建安中客として
濟陰に在り神異の道あり後逃去て所在を知らず。
後人あてて又長安の東霸城の邊までこまを見ふ。一老
翁と共り銅人々を摩率を相謂て曰たよく是を鑄るを見
るに五百歳に近しと。注に酈道元水經の注を引て曰
魏文帝黃初元年長安の金狄を徙を重して致をへうら
を因て霸城に留む。方術傳○水經の注此も亦銅駝の
説ハ曾てあり或は此時に銅駝ハ既り洛陽に徙りて金
狄の舊物のこま霸城のこまなる多や。
世説云索靖ハ先識遠量あり人して天下の亂るべき

きを前知し洛陽城門の銅駝を指して嘆いて曰會汝が
荆棘中にあふと見ん。識量の篇○晉書本傳銅駝の事ハ
爰に至り僅り見へり蓋魏の明帝こまを洛陽に徙し
晋の武帝魏を篡りて又洛陽に都り其地ハ秦よりて
傳來の索駝ありハこと。此索靖が言ありたりさらハ秦
本紀云ハ索駝を鑄る事なくして通鑑魏紀の注云は
いなり。曰是ハ秦本紀通一書き漏りて其後の諸書こま
を承て索駝を鑄る事不及はさふ也始皇の時必も索駝
城を鑄て漢晋と相傳へり事ハ明りなる證據あり余
適一史記を閲して是を得たり。史記ハ東方朔酒酣に
て地を據て歌て曰世俗に陸沈し世に金馬門を避く。褚

索駝考

九

少孫、曰金馬門ハ官署の門ナリ。門旁に銅馬あり。故に是を謂て金馬門と云。滑稽傳ハ即ち褚少孫の補み処ナリ。褚少孫ハ是前漢元帝ノ成帝との間の人ナリ。面のおたり是を視て親しくことと説き書ふ録して、こゝを傳ふ信をへき事ことと云。平一きハか。さらば銅狄ま。銅駝な。共。是始皇二十六年ノ鑄る処にして。漢々晋に傳ハ。一。事毫髪の疑を容ふへ。ら。細目晋の惠帝大安元年の條人を銅駝の下に誅せんまの詳大記の法と引て始皇銅駝と鑄ると云。是。尹奕華等。聽安。今本。此。是。余。此考を作るハ。荀卿。所謂無用の辨不急の察。こと。と。甚。き。ハ。か。但。自。謂。に。世。に。好。事。家。と。云。何。了。古。董。各。畫。と。談。一。点。一。畫。の。向。一。物。一。器。の。上。に。屑。々。と。

皓首衰年かを通了せむ。俛馬孳々斃るを以て自ら期を抑ふるの心とや。宋儒の所謂格物窮理と云。その古董各處を談をふ者。近うらんや。余。此考の如き。近うらんや。虚心無我の人。不質をへ。説。郭。の。叔。不。所。に。論。駝。經。あり。目。あり。て。書。お。後。世。陶。南。村。あ。ら。ば。我。り。此。書。の。如。き。も。焉。と。採。収。せ。ら。ま。さ。る。を。知。ら。ん。や。公。愷。再。識。

索駝考

索駝考

辛丑

它山先生著述目錄

孝經攷觀 二卷

朱子ノ刊誤ニ本ツキ。孝經ノ論語諸卷ト。抵悟スルヲ逐一ニ辨論スル各十リ。

韓非子論解 五卷

慘激必恩ノ道ニ倍テ行ヘカラサルヲ論シ。且文字章句ヲハ能解セリ。

白鹿洞学規發揮并儒辨 一册

讀論語集註 五卷

朱子ノ意ニテ。朱子以前漢魏傳注ヨリ出タル淵源ヲ録ス。

莊子全解 内篇七卷

清畫錄 二卷

清人ノ畫品人物ヲ論ス。張米庵ノ書畫舫ノ如シ。在刻。

統餘詹言 五十册

唐宋ノ詩注家ノ道及ハルヲ考ヘ。八家ノ文ノ妙ヲ發明シ。奇書十リ。近出。

江戸兩國横山町三丁目

和泉屋金右衛門

